

たまたま、ヘンゼルとグレーテルの原典を読む機会があった。有名なグリム童話集のものごとりと妻と二人の子どもたちのはなすむきこりと妻と二人の子どもたちのはなしである。あるとき、ききんがあつて、毎日のパンもなくなり、きこりは床にはいっても心配のために眠ることもできない。そこでためいきをついて、妻にいうのである。「どうしたらよいだらう。わたしたちの自分のためのたべものもないのに、どうしてかわいそうな子どもたちを、やしなうことができるだらう」すると継母である妻は、子どもたちをあすの朝、森につれていっておきざりにしようとしてそのかすのである。きこりはなかなか心がきまらぬ。妻はそそのかす。そのあいだの会話がつづいて、それからみんなの知っているはなしの部分にはいるのである。

年輩のひとなら、このものがたりのこの最初の部分を思いだす人も多いだろうとおもう。けれども、いま子どもの眼にふれる絵本や子どもの本には、このような心のある現実的なはなしはほとんどけずられてゐる。それは、子どもにはこういう残酷なはなしはきかせないほうがよいという理由もあるらしい。しかし、いまの多くのこ

もたちは、こうして、生活のまずしさとか、死というような人生のほんとうの姿にふれることなくおとりすぎてしまうのである。ものがたりまで、砂糖につつまれたような、骨ぬきものにしてしまつたら、子どもたちは、ただおもてむきのうつくしきや服装にだけしか眼のとまらぬものになつてしまわぬのであろうか。

ヘンゼルとグレーテルの最後の部分では、子どもたちはだんだんに知っている森にもどつてきて、ついに遠くから父の家をみつめ、走つて、家にかけてこんで、お父さんの首にかじりつく。きこりは子どもたちを森におきざりにしてからこのかた、たのしい時をすごしたことはなかつたのである。こういううれしきも、最初の部分がかつたら、知ることはできないであらう。

子どもたちに、あえて刺激的な残酷さをあたえるのはよくない。しかし、人生の途上で、であわなければならぬほんとうのことをさけて通つてはならないのである。このことは、現代社会の特徴ともいえる、無責任体制をつくりだすことにもかかわりがあるのではなからうか。子どもの絵雑誌にあふれている児童文学の骨ぬきのつくりなおしに、抗議をしたい。

幼児の教育 第六十八巻 第五号

五月号 ©定価八〇円

昭和四十四年四月二十五日 印刷
昭和四十四年五月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
フレーベル館にお願いいたします